

府中ホスピスを考える会通信 第7号 06/11/11



府中市社会福祉協議会・福祉活動推進支援事業「講演会」の開催に寄せて

小西 厚子

「府中ホスピスを考える会通信 第7号」をお届けします。この通信・会報は、年2回発行していますが、勉強会（講演会）などに参加できなかった会員の皆様はその内容をお伝えすると共に、私たちの会の活動を会員以外の方々にも知っていただく広報紙としても役立つものと考えています。

第7号は、2006年11月11日（土）、野村祐之先生の講演会『ときめく「命（いのち）を生きる』にあわせて発行いたします。この講演会は、今年度の総会に参加した会員の皆様には申請をしたこととお話しましたが、「平成18年度 府中市社会福祉協議会・福祉活動推進支援事業」への助成を受けて、広く府中市民の皆様にもご参加いただける事業として企画いたしました。

講師の野村先生は、現在は青山学院大学講師でいらっしゃいますが、世界教会協議会教育部（ジュネーブ）に勤務後、米国ニューヨーク・東ハーレムの教会伝導師、米国初のホスピス（コネティカットホスピス）で芸術ボランティアとしてご活動なさったご経験をお持ちです。いろいろな所で「いのち」（「いのち」というコトバの原点からのお話）についてのご講演をされておられることを知り、府中市でもお話をさせていただくことになりました。今日、府中市生涯学習センター講堂にご参集された皆様とご一緒に、先生のお話から「いのち」について考える時間の持てることを楽しみにしてまいります。

さて、第7号の記事は、会員の皆様にご案内した9月9日（土）開催のケアタウン小平・聖ヨハネホスピスケア研究所共催 第1回講演会『永六輔 いのちを語る』の詳しい内容が中心です。参加できなかった皆様にも、永六輔氏の楽しいお話ぶりとお話がよくわかると思います。

8月20日（日）の第16回勉強会、NHK 厚生文化事業団より借りたビデオテープの上映による「ホスピスに関するQ&A」についての内容は、当日参加者に配布した資料がありますので、必要な方はご一報くださればお送りいたします。この問題については、また、機会をみて勉強会を計画してもよいのではないかと考えています。

声

駒ヶ嶺 素秀

ケアタウン小平と聖ヨハネホスピスケア研究所の共催による第1回講演会が去る

9月9日(土)19時より小平市の「ルネこだいら」大ホールで講師に永六輔氏(放送作家)と山崎章郎氏(ケアタウン小平クリニック院長・聖ヨハネホスピスケア研究所所長)を迎えて「いのちを語る」という題で行われました。これから、その折りの講演の内容を紹介します。午後6時半、会場に入りましたが開演30分前なのに既に会場は約1200人の座席がほとんど一杯の状況でした。

主役の講師がマイクを握って現れ、舞台上上がる中央の階段に直接座り、場内案内・場内整理係が行うような役割をご自分で行いつつ「ハイあと15分で開始です」「あと10分です」「あと5分です」といった言葉を挟みつつ、「これはまだ本題の『いのち』とは関係のない話です」等と言いつつ、氏の体験から得られた豊富な話題トピックを次から次と連発されその度に会場がどっと笑いに包まれた。

「ハイあと3分です」「丁度開始の時間になりました」「では、これから『いのちを語る』のテーマで講演に入らせてもらいます」と言うような講演の入り方でした。普通なら主催者側から司会者が出て来て、改めて講演のテーマを紹介し、講師を紹介して始まるのですがそれは省略でした。

講演内容は4つの柱が立てられました。

- 1、かかりつけの病院医師を持っているか、できたら持て、ということ。
- 2、いい患者になれ、ということ。
- 3、「いのち」ってなんだ、ということ。
- 4、老いについて、老いはどうやってくるか、ということ。

そして後半の2部は山崎章郎先生と二人司会者なしの直接の対話でした。

さて、1の導入として本会場に参加している全員にある質問をして挙手をさせつつ、

- (1) 一人っ子の方手を挙げてください。と言って数えました。1200名中24名
- (2) 二人の方3名 (3) 三人の方56名 (4) 四人の方8名(途中筆者メモを採りそこね)
- (5) 八人兄弟9名、(6) 10人兄弟4名

この挙手による調査の結果で高齢者世帯は兄弟姉妹が大変多いということがはっきりしました。ところが、昭和30年代から少子化現象が進み、一人っ子がどんどん増えつづけて現在に至りました。

その結果、一人っ子と一人っ子が結婚すると四人の親を持つことになり、やがて四人の親を面倒みなければならぬという現象が起こっている訳です。

昔は大家族制の社会でしたから、高齢者の看取りは沢山いる家族の中の誰かが(あるいは交代で)介護できました。今はそれが出来なくなりました。そこで「介護」の問題が起こったわけです。

ところで、日本で一番の長寿県は長野県、二番目は山梨県とのこと。その理由は病院(医師)と民間人との間にみごとなネットワークが作られているからであるといえます。同県には著名なネットワーク作りに理解のある医師が何人もいるからで、紹介された医師に鎌田實氏(私もよく知っている方です)若槻医師・遠藤医師(私はよく知らない方で、フルネームで書けません)

つぎに「いい医師」というのが問題になりました。「いい医師」の見つけ方が具体的に紹介され、

- ① 患者の話をよく聞いてくれる。 ② 医師の話が分かりやすい。
- ③ 薬に頼らない。 ④ 患者の暮らしに注意を与える。
- ⑤ 専門医を紹介してくれる。 ⑥ (メモ取り損ねです)
- ⑦ その地域に詳しい。 ⑧ セカンドオピニオンを紹介してくれる。
- ⑨ 患者の辛さ、苦しさ、悲しさ、寂しさを理解してくれる。 ⑩ 本当のことを伝える医師。

つぎに「いい患者」の条件とは何か。永氏が考えた十ヶ条は、

- ① 患者は本当のことを教えられても驚かない。
- ② 勝手に自分の病気を決めない。
- ③ 看護婦(看護師という名称は嫌いだと特にその訳を力説しておられた)の説明が気に入らなくても、素直に聴いているふりをする。

- ④ いい患者は自分の命の終わりを考えない。死なないと思う方がいい。
- ⑤ 医師の前で気取らない。
- ⑥ いい患者は遠くの医師よりも近くの医師の所に行く。
- ⑦ 奇跡を信じない。
- ⑧ 職人気質の医師を選ぶ（失敗したら金は受け取らない医師）（“爆笑”）
- ⑨ 医者が「ご臨終です」と言ったら死んだふりをする。（“爆笑”）

もう一つは聞き漏らしました

そしていよいよ三つ目の柱「いのちとは何か」に入りましたが、ここで永氏は特に次のことを強調されました。「これからみなさんに小学校の低学年ぐらいのひとになってもらいます。そのつもりでこちらが質問しますので返事をお願いします」と。

「食事をするとき『いただきます』と言う人」と挙手を求めて「では、その意味は何でしょう」と尋ね「それは『あなたの命を私の命に入れていただきます』という意味なのだ」「そうやって私たちは生きている」「生きるということは家庭の中で生き、東京で生き、日本で、地球で、太陽系で、銀河宇宙で生きている訳で……」然も「50億年前に地球が誕生し……35億年前に生命が誕生した。この生命が少しずつ少しずつ進化し猿が生まれ人間が生まれた。だから私たちの『いのち』の源流は35億年遡ることになるのだ」と結論しました。

「私たちはこの命を父と母から授かり、父母は祖父母から、祖父母は更に曾祖父母から授かったのだ。五代も遡るとどれだけの祖先が生じるか、その中の誰かが欠けていても今の私たちはここに存在しなかった。だからこの「いのち」を絶やさぬように次の世代に継承してゆかねばならないのだ」というように話が進められました。

そして、最後の四つ目の柱「老いについて」に進みました。

世の中はどんどん変化している。この変化について行けない人は老いたということなのだが、具体的に事例を挙げると「体調がおちてきている」「好奇心が薄れてきている」「ど忘れが多くなった」「涙もろくなってきた」「自責の念に駆られるようになった」「他人の悪口が多くなった」「他人を恨むことが多くなった」こういう人は老いてきている証拠で、更に

- ① テレビに相槌を打つようになった。
- ② テレビに向かって怒るようになった。
- ③ テレビのコマーシャルが何のことか分からない。
- ④ 固有名詞が出てこない。
- ⑤ くしゃみをすると屁がでる。
- ⑥ おしっこの切れが悪くなる。
- ⑦ トイレに行ってもチャックを下ろそうとしたとき既にチャックが下りている。（爆笑）
- ⑧ 何度もつまづく。

こういう人は要注意ということですよ。

ここまでで、前半の講演が終わりですが会話中随所に笑いの話が含まれ爆笑に続く爆笑がありました。また、沢山の著名人達との話もあり永氏ならではのユーモアがありました。野坂昭如、小沢昭一、黒柳徹子、日野原重明、遠藤周作、石原慎太郎各氏が話題の中に登場しました。

後半第二部は山崎先生も出て来られ、お二人の対談。

「人間・生命の起源論」とでもいうような話題から「生命は有形のものだけではなく霊魂的なものまでを含むのかも知れない」というところまで展開された。そして永氏の「奥さんの死とみどり」のことと「山崎先生の「死生観」」とについていいことと「ホスピスの系譜は日本にもあった」ということと「昔と今の看取りの違い」山崎先生の「小平ケアタウンは秋田県の鷹巣町のケアタウンがヒントになった」ということ等々でした。

府中ホスピスを考える会講座実施歴

	日付	テーマ	講師
特	01/10/28	がんと向きあったとき、あなたならどう生きますか	聖路加国際病院名誉理事長 日野原 重明
1	02/02/17	「ホスピスの体験から」	ピースハウス病院ナース 杉本 真由美
2	02/04/28	「在宅ホスピスケアについて」	ピースハウス病院ナース 杉本 真由美
3	02/07/14	「緩和ケアで使われる薬について」	薬剤師(元ピースハウス病院職員) 玉井 照枝
特	02/10/11	アサヒタウンズ特別講演会「日野原先生」	
4	02/11/24	「心と身体の痛みを癒すには」	くらしき作陽大学教授 篠田 知璋
5	03/05/18	地域に密着した在宅ケアについて	平林医院院長 平林 竹一
6	03/06/10	ホスピスセミナー	桜町聖ヨハネホスピスケア研究所長 山崎 章郎
7	03/08/03	「ヨーロッパのホスピス事情」	府中ホスピスを考える会副会長 市村 晴子
8	03/10/26	家で最期をむかえるためにー在宅ホスピスケアの実際ー	ホームケアクリニック川越院長 川越 厚
9	04/04/18	「家族の立場からホスピスケアを見る」	府中ホスピスを考える会会員 駒ヶ嶺 泰秀
10	04/09/10	輝いて生きるー人生の後半をー	聖路加国際病院名誉理事長 日野原 重明
11	04/11/07	コミュニティで考えるこれからのホスピスケア	聖ヨハネホスピスケア研究所研究員 長谷 方人
12	05/06/05	夫をガンで見送ってー入院治療3ヶ月後の不安ー	府中ホスピスを考える会会員 森山 レイ子
特	05/09/24	地域で生きるー尊厳ある生と死を求めて	聖ヨハネホスピスケア研究所長 山崎 章郎 他
特	05/10/30	いのちと響き合う絵本	ノンフィクション作家 柳田 邦男
13	05/11/26	更年期障害と子宮癌	東府中病院長 十蔵寺 新
14	06/03/26	人間のいのちと死ー終末期医療からみる	医学博士・医療法人恵風会施設長 渡邊 寛宣
15	06/05/21	千倉市『花の谷』(ホスピス)の紹介	府中ホスピスを考える会副会長 市村 晴子
16	06/08/20	NHKビデオによるホスピスに関する Q&A	府中ホスピスを考える会副会長 市村 晴子
特	06/09/09	永六輔 いのちを語る	ケアタウン小平・聖ヨハネホスピスケア研究所共催
17	06/11/11	ときめく「命(いのち)」をいきる	青山学院大学講師 野村 祐之
18	07/04/01	さいごまで生きる施設-ホスピス-でのとき	ライフプランニングセンター所長 平野 真澄



会計より会員の皆様へのお願い 会費の払い込みをどうぞよろしくお願い致します。勉強会・講演会等当日でも、郵便局への振込でも結構です。振込用紙ご入用の方は、会計までご連絡いただければお送りいたします。

会計 宇田ひさ子 042-363-9271

編集後記 今年の桜がちょうど見頃の時に、この総会が開かれます。春に浮かれているまに年をとり、介護の必要に迫られて慌てることの無いように普段から考えておくことが必要かもしれません。

介護や暮らしについての心配事、たとえば「一人暮らしが不安になったが、相談するところはないか？」などの悩み事は、府中市社会福祉協議会、または各地区に介護相談員がおりますので、お気軽にご相談を福祉協議会の方のお話を伺いました。

日野原先生の講演会ポスターを3ページに入れましたので活用してください。

「通信」編集委員 駒ヶ嶺泰秀、荒川京子、小西厚子、滝山満子、和田総一郎

発行元 府中ホスピスを考える会編集部 連絡先 小西厚子 042-351-4583